

Journal
of the
Japanese
Institute of
Landscape
Architecture

ランドスケープ研究

特集

100周年記念特集号(その3) 社会の変化とランドスケープ

JILA 100th Anniversary Special Issue (Part 3)

— How should landscape architecture respond to social change ?

vol.
89 | 02

August 2025

公益社団法人
日本造園学会

ISSN 1340-8984

2024 年度日本造園学会賞・奨励賞・上原敬二賞・田村剛賞の選考結果について

学会賞等選考委員会 委員長 大黒 俊哉

本学会では、「日本造園学会賞」、「日本造園学会奨励賞」「上原敬二賞」、「田村剛賞」を授与している。これらの賞はそれぞれに長い歴史と成り立ちの経緯をもっており、造園学の広範な領域を多様な観点から顕彰してきた。2024 年度も多く推薦・応募があり、学会賞等選考委員会による慎重な審議の結果、ここに御報告する個人および団体が各賞に値すると評価された。受賞された皆様の栄誉をたたえとともに、推薦・応募いただいた会員各位に感謝申し上げたい。なお、日本造園学会賞受賞者の業績内容については、本号に掲載した。また、上原敬二賞受賞者については、次号以降に受賞インタビューの内容を学会誌に掲載する予定である。

● 2024 年度日本造園学会賞について

日本造園学会賞候補者には、研究論文部門に 0 件、著作部門に 3 件、設計作品部門に 3 件、技術部門に 1 件、事業・マネジメント部門に 1 件、合わせて 8 件の推薦・応募があった。学会賞等選考委員会では、これらの業績について慎重に調査ならびに審議を行った。その結果、以下に示すものを日本造園学会賞として選考した。

■ 著作部門（2 件）

・『生まれ変わる公園 公園リノベーションの指南書』執筆者一同
（代表：平田富士男）「生まれ変わる公園ー公園リノベーションの指南書ー」

本著作は、日本造園学会に設置された都市公園リノベーション計画技法研究推進委員会の議論の成果をとりまとめたものであり、都市公園リノベーション事業（以下、公園リノベ事業）に取り組もうとする関係者に向けた提案となっている。

構成は計画、実例、制度面からなる。計画面では、社会の潮流に合わせて公園リノベ事業が改修から再生へと推移していることをふまえて、計画的に進めることの意義と視点をまとめている。実例面では、大規模個別公園や面的な指定管理における具体例を取り上げている。多面的な要素が複合される公園リノベ事業の実像を浮き彫りにしており、比較対象による特性の把握も可能なように配慮されている。造園業と商業事業との関わりや、造園コンサルタントの役割や視点についても、具体例を元にわかりやすく記述されており、造園領域からの視点による公園リノベ事業の改善に有意義なものと考えられる。制度面では、公園リノベ事業をエリアマネジメントへつなげてゆく提案、事業継承や基礎的情報の記録と継承、関連する法制度の系譜と方向性が図表を用いて視覚的に理解されやすいようにまとめており、制度の展開や定着に貢献するものと考えられる。

公園リノベ事業や公民連携は今後も増加していくことが予想されるが、改善点と可能性が明らかになりつつあるこの時期に取りまとめられることの意義は大きい。このように、本著作は、制度創設から 150 年を経た都市公園におけるリノベーション事業の展開に貢献すると評価できるとともに、造園学の発展に寄与する優れた内容である。

以上より、学会賞（著作部門）を授与するに相応しいと判断された。

・進士五十八氏「進士五十八の日本庭園 技心一如で自然に順う」

本書は、庭園の特質を「人間の理想郷を目標とした環境デザイン」とし、そのなかでも日本庭園は「自然共生の造園思想」に独自性があるとする。結果、いわゆる日本庭園を軸としながらも、神社仏閣の在り方から農山漁村のランドスケープ、現代アーティストの作品まですべてを庭園の範疇として、その根底に流れる自然共生思想をもってこれからの造園の在り方とその具体的方策を提案している。日本庭園の枠組み・概念を大きく広げた点について、高く評価できるものとする。

日本庭園の書というと、時と場所によって変化する庭園様式を追うのが一般解だろう。それは、歴史学の一角を担いながら、庭園の作庭背景や造形に共通に認められる一定の在り方を評価しようとする姿勢である。それに対して本書は、様式に収めるのではなく、多彩な気候風土に根ざす日本庭園の多様性が大事だと説く。生物の多様性や人の生き方の多様性を求める現代において、現在の課題認識に立ちつつ、未来の理想像を思い描きながら、古代から現代にかけての庭園の思想と技術を読み解いていることに、著者の独創性と革新性がある。

また、本書は日英の二か国語版として出版されている。写真や図、その解説も豊富で、世界に対して広く伝わることを重視していることが読み取れる。日英の両方を読むことで本書の内容をより理解できる点も意義深い。

以上より、学会賞（著作部門）を授与するに相応しいと判断された。

■ 設計作品部門（2 件）

・大野暁彦氏「くぶる一むの風>他、一連の林地再生をテーマとする作品」

代表作として挙げられているくぶる一むの風>の庭は、小規模ながらも既存の植生に細やかに配慮し、境界構造物を改変して、地域の緑を守りつつ開かれた空間が生み出されている。診療施設にありがちな閉鎖性を払拭し、屋外ファニチャーを建築と自然の中間に効果的に配置することで、利用者や地域住民の積極的な屋外利用を促す効果が高く評価される。園路の線形は微地形に寄り添い、丁寧に処理されたエッジや控えめなサイン類が自然に溶け込みながら手作り感も保っている。また、ゲートやフェンスを廃する設計により、樹林の一部伐採というネガティブな要素を街路景観の向上へとポジティブにつなげた点も注目に値する。

大野氏は他のプロジェクトにおいても、林地の徹底調査を基盤に、種子の採取や苗の育成から関わる独自の実践を続けており、施主や住民と協働する過程自体が森林生態への関心を高める教育的効果をもたらしている。こうした一連の取り組みは、生態学的視点と造形力の高いデザインを融合させる質の高さを複数の案件で一貫して示している。

以上より、学会賞（設計作品部門）を授与するに相応しいと判断された。

・荻野彰大氏「福武トレス ～旧福武書店迎賓館庭園再生と新築棟への展開～」

本設計は、1985 年に施主の福武美津子の父である福武哲彦と小形研三が手がけた、既存の木造数寄屋建築を有する「旧福武書店

迎賓館庭園」の復元と共に、ギャラリーを構えた鉄骨造の新築棟周辺に新たな庭園を創造した作品である。

復元は、当時の地割りや樹木の枝ぶり、独特の苔のラインにいたるまで忠実に再現することで小形氏の作庭感覚を継承しつつ、音を楽しませる滝組等、秀逸な創造的復元が散見される。加えて、岡山の気候風土や庭園の背景となる半田山の植生を参考とした植栽計画による適地適木の植栽や、植物ごとの特性に合わせた土壌改良の実施、根茎による斜面保護のための柱状改良の実施等、状況に合わせた施工により庭の維持管理を行いやすい形にしている。

新たに創造された新築棟ギャラリー周辺の庭園では、新たな自然との調和をコンセプトとした「森の中に溶け込む建築」が実現されている。基礎工事後、躯体施工前に床下部の造園を行う等、建築と造園を交互に施工することによって建築と庭園をつなぐ境界が融和され、一体化した空間を提供することに成功しており、現代の新しい庭園スタイルを確立している。未就学児の入場規制やバリアフリー未対応といった点はあるものの、今後の庭園の維持管理に対しても明確な戦略を持っており、時間の経過が味となる継承を期待したい。

以上より、学会賞（設計作品部門）を授与するに相応しいと判断された。

■ 技術部門（1件）

・植彌加藤造園株式会社「椿山荘庭園における「令和十二景」の創造—日本庭園の「心と技」の共有・共感を重ねた育成管理技術—」

椿山荘庭園は山縣有朋によって造営され、現在はホテル椿山荘東京の敷地となっているが、近年コロナ禍により庭園の管理水準は落ち込んでいた面もあった。本事業はこの状況の中、造営当時の魅力を引き継ぎ、連続する水景や高低差のある地形を活かした風光明媚な庭園を、次世代に引き継いでいくために蘇らせるという造園技術の発展に寄与する事業と言える。

植彌加藤造園株式会社では、歴史的な資料や言説の分析を行い、また、同じく山縣による造営である無鄰菴の指定管理によって培われてきた技術も導入し、庭園の修景を行っている。その際には、ラグジュアリーホテルとしてのイベントや高級飲食店の展開にも合わせる必要がある。敷地の状況が変化するなかで、歴史の変遷とともに培われてきた美しさを、現代の使いこなしにも対応させているのは見事である。当初の「椿山荘十勝」に加え、その本質を活かし発展させた「令和十二景」を創造したことも評価できる。

また、継続的な取り組みとして、現場で作業する人と定期共有会も実施し、センサーツアーとして機能する仕組みも展開している。これは庭園における継続的、横断的な管理体制の構築の実績として貴重であり、前述の景観を維持発展させる独自の技術として優れたものであると感じる。具体的にわかりやすく、平易な言葉で記載された「育成管理指針」は、歴史的な記録や関係者の思いも込められており、オリジナリティを感じる。

散策する人の姿と共に美しい風景が生み出されている椿山荘庭園の施工・維持管理技術は、今後の造園技術発展につながる業績である。

以上より、学会賞（技術部門）を授与するに相応しいと判断された。

■ 事業・マネジメント部門（1件）

・東京農業大学造園科学科「農大造園の100年と100人のしごと」企画チーム「東京農業大学造園科学科100周年記念 時代をつくる造園家のしごと」

本事業は、東京農業大学造園科学科の100周年を記念し、同大

学の教員、卒業生である造園家（ランドスケープアーキテクト）の仕事を書籍としてまとめている。その中には、庭園、公園、景観まちづくり等に大きな貢献をされてきた人々の業績が収録されている。造園・ランドスケープ分野において第一線で活躍する多様な人々の姿を描くことにより、分野の100年の軌跡を俯瞰し、しごとが時代の流れに応じて変化し、裾野を広げ社会の各所に浸透しているさまを描きだし、造園・ランドスケープ分野の社会的な位置づけを明らかにすることに成功している。これまでの周年誌事業とは一線を画し、100人のしごとを本人、企画チーム、あるいは関係者が著述する構成となっており、1冊の書籍というかたちでとりまとめたことは、事業の成果として高く評価される。

事業の性質上、人選が東京農業大学の関係者に限定されてはいるものの、東京農業大学造園科学科の100年を、造園・ランドスケープ分野や社会全体の動きと対応させながら整理されるとともに、各分野における造園家の主張や作品、その社会的影響なども踏まえた記載がなされており、一般の読者にも造園の分野をより魅力的に示唆することが可能な内容である。事業として、多数の関係者の執筆内容を取りまとめており、造園学の進歩、発展に顕著な貢献をすると評価できる。

以上より、学会賞（事業・マネジメント部門）を授与するに相応しいと判断された。

● 2024年度日本造園学会奨励賞について

日本造園学会賞奨励賞については、ランドスケープ研究において発表された論文をもとにした選考、及び自薦・他薦による公募の2種類の選考方法を設け、審査を行った。その結果、以下の5名が選考された。

■ 日本造園学会奨励賞：研究論文部門（1名）

・佐々木啓氏「国立公園におけるビジターセンター等の役割と利用者特性に関する一連の研究」

【評価対象業績】

- ・佐々木啓(2024)：阿蘇山上ビジターセンターにおける来館者の展示の観覧と意識変化。ランドスケープ研究, 87(5), 373-376
- ・佐々木啓ほか(2023)：コロナ禍における尾瀬国立公園の利用特性と滞在型利用、若年層利用にむけた課題。ランドスケープ研究, 86(5), 529-532
- ・佐々木啓ほか(2022)：国立公園のビジターセンターの管理者による情報発信と活動の差異。ランドスケープ研究, 85(5), 525-528

■ 日本造園学会奨励賞：著作部門（1名）

・福島秀哉氏「＜ムラナカ＞の公共デザイン 山中湖村の生活文化と景観まちづくり」

【公募選考の評価理由】

本書は著者の博士論文をもとに、景観まちづくりから公共デザインへの展開における問題意識や山中湖村でのまちづくりの実践をまとめている。村の形成史と深くかかわる地域の生活文化に根ざした計画やインフラ整備のあり方を模索し、本書において、地域の中心部「ムラナカ」に着目し、「ムラナカの領域」という概念を提示した。

著者は、対象とした山梨県山中湖村の本質的な住民主体の景観まちづくりを推進するため、近世から現代までの地域社会と生活空間の動態の変化を詳細に明らかにし、多くの現場、経験から見出した「ムラナカ」の意味と変化を可視化させた。空間やインフラの整備、地域コミュニティの特徴の変化を分析しながら、「領域の感性」を継承する公共デザインに取り組み、人口減少社会の中

椿山荘庭園における「令和十二景」の創造 —日本庭園の「心と技」の共有・共感を重ねた育成管理技術—

Creating "12 scenic views for the reiwa period" at chinzanso garden :
Garden management that shares the "spirit and skills" of japanese gardens

田中 幹 Motoki TANAKA

植彌加藤造園株式会社 計画設計部

1985 年京都市生まれ。2014 年京都造形芸術大学（現京都芸術大学）大学院博士課程修了，博士号（芸術）取得。2020 年より，京都芸術大学芸術教養センター非常勤講師。京都市内の博物館勤務を経て現職。

山口 満 Mitsuru YAMAGUCHI

植彌加藤造園株式会社 庭園部

1974 年兵庫県生まれ。2023 年京都芸術大学通信制大学院修士課程修了。京都産出の名石「加茂七石」の研究に取り組む。

加藤 友規 Tomoki KATO

植彌加藤造園株式会社 代表取締役社長

1966 年京都市生まれ。1990 年千葉大学園芸学部卒業。1848 年創業の「植彌加藤造園」8 代目。2005 年に同社代表取締役社長に就任。2018 年より京都芸術大学大学院教授。現在，同院で「日本庭園デザインスタジオ」を指導。

1. はじめに

日本国内を見渡せば，世代を超えてその魅力が語り継がれる名園が数多く存在する。なかでも椿山荘庭園は，明治期の元勳・山縣有朋が 1878（明治 11）年に並々ならぬ熱意を注ぎ造営したもので，現在も「ホテル椿山荘東京」として特別な存在感を放っている（写真－1）。

山縣は，日本の近代史を支えた軍人・政治家として広く知られているが，『公爵山縣有朋傳』（全 3 巻（上中下），徳富猪一郎編述，山縣有朋公記念事業會，1933（昭和 8）年）などにあるように，その人柄は「築庭の趣味が最も濃厚であった」。何より彼の庭園観は，水辺の景観が重要な位置を占めていた。山縣自身が詠んだ「椿山荘十勝」を見ても明らかである。この独自の庭園観は，いくつかの回顧録や既往研究でも指摘されてきたが，1918（大正 7）年に所有者が藤田平太郎男爵へ移って以降，また戦後の開業以降も，遺棄されることなく今日に至った点は改めて注目に値する。現在もなお，敷地面積約 49,500 m²を誇る雄大な景観が，訪れる人びとを魅了してやまない。

しかしながら，何事も一筋縄ではいかないのが世の常である。例えば，2020（令和 2）年には新型コロナウイルス（COVID-19）が猛威を振るい，世界の経済を直撃した。とくに多くの人びとの往来があつてこそ成り立つ観光サービス業は大打撃を受けたわけだが，ホテル椿山荘東京も例外ではなかった。同年 4 月に政府が「緊急事態宣言」を発令し，行動制限が厳しくなった影響で，当地の庭園管理もまた歯がゆい状況が続いた。草木は繁茂し，樹冠は混み合

い，これまで保たれてきた当地の美観はわずかな期間で変貌を遂げていった。

一方，同時期のホテル椿山荘東京は，開業 70 周年を目前に控えていた。記念式典が予定される 2022（令和 4）年秋に向け，何としても庭園のあるべき姿を取り戻す必要があつた。このとき，偶然にもご縁をいただいたのが弊社植彌加藤造園であった。弊社は，京都東山を借景とする「無鄰菴（第三無鄰菴）」の年間管理業務を 2007（平成 19）年度より受託，2016（平成 28）年度からは当地の指定管理者として運営管理を担ってきた。椿山荘が山縣の本宅であつたのに対して，無鄰菴は 1896（明治 29）年，還暦を前に造営した別荘である。尚かつ無鄰菴は，先の大戦や天災等で目立った被害を受けておらず，往時の姿を殆どそのまま留めていることから，彼の庭園観を直接探求する



写真－1 ホテル椿山荘東京（ホテル椿山荘東京提供写真）

には絶好の環境となっていた。この無鄰菴の庭園を日々管理してきたことが大きな決め手となって、ホテル椿山荘東京と弊社との連携体制が、徐々にかたちをなしていくこととなった。

2. 開業 70 周年と「令和十二景」

未曾有の苦難に直面していたホテル椿山荘東京であったが、当時のニュースサイトで報じられた通り、運営母体である藤田観光株式会社は「なんとしても椿山荘は守りきる」という姿勢を強く示した。多くの民間企業が、繰り返されるコロナの影響下で先の見えない不安を抱える中、同社が発信したメッセージはきわめて強烈で、感動的であった。

こうして2022(令和4)年、当地の庭園管理チームに加え、日ごろ無鄰菴の庭園を手掛ける弊社庭師たちが合流し、修景整備工事がスタートした。まずは、当地の本質的価値を最もよく示す滝や流れ、池に焦点を絞り、現存する聴秋瀑、古香井、雲錦池を、さらには昭和期に造られた五丈滝、料亭「錦水」中庭の整備を進めていった。その際、庭師たちの会話の中心には、つねに各エリアの古写真があった。これらの資料を手掛かりに、過去の所有者たちの想いを汲み取りながら作業を進めていったわけだが、例えば最初に整備を進めた五丈滝を見てみよう。この豪壮な滝は、まず下段部分を、藤田観光初代社長・小川栄一指揮のもと1965(昭和40)年に竣工(写真-2)。後年造られた中・上段部分は、昭和・平成期に活躍した伊藤邦衛による設計ということが判明していた。このため、昭和期の庭園案内図や掲載記事を改めて収集。竣工間もない滝の姿や設計者のインタビューを参照しつつ、生い茂った実生木やオオイタビの整理、関係設備の調整等を進めていった。次第に滝石組の巨石群が姿を現し、息を吹き返したかのように轟々と鳴り響く滝の音が、関係スタッフや来館者を驚かせた。



写真-2 昭和42年頃のパンフレットに掲載された五丈滝
(ホテル椿山荘東京提供写真)

聴秋瀑、古香井、雲錦池についても同様に、まずは施設内に残された古いファイルやアルバム等を集め、関連する

古写真はもちろん、古香井周辺を愛した藤田男爵夫人・富子による『椿山荘記』(私家版、1952(昭和27)年)などを主な参考資料として整備を重ねていった。とりわけ劇的な変貌を遂げたのは、のちに「望郷橋からの水景」と名が付されるエリアである。当エリアは、地下水を利用し造られた五丈滝から幽翠池を経てつづく水系と、ほたる沢を水源とする水系が交差する地点である。複数の水系が交わる姿は、山縣の生誕地である山口県萩市の松本川・橋本川を彷彿とさせる重要な景観であるが、初めて臨場した際には、近接する施設を隠すため植栽された樹木によってその姿が遮られていた(写真-3)。近代自然主義庭園の手本であるべき当地において、やや異質な“仕立物”の樹木という点も違和感があった。そのため、弊社は「この景観こそが山縣の庭園観を示す最たる要素である」と関係者に説得を重ね、対象の樹木を伐採するとともに、付近の中低木にも修復剪定を施し、ここに新たな視点場・視対象が実現することとなった。現在では、多くの来館者が思わず立ち止まってカメラを構える人気のエリアとなっている(写真-4)。



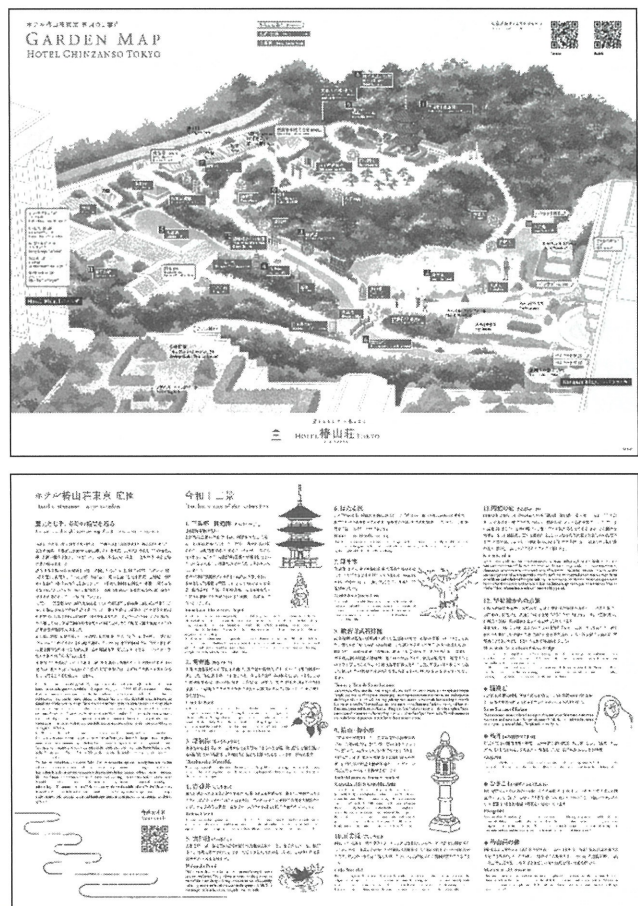
写真-3 伐採対象となった樹木



写真-4 整備後の望郷橋から望む水景

以上のように修景整備を積み重ね、晴れて開業70周年を迎えた当日、あわせて発表されたのが「令和十二景」である(図-1)。当地には、すでに山縣が遺した「椿山荘

十勝」，そして10年ほど前に作られた「椿山荘新十勝」が存在していたが，修景整備をはじめとする取り組み（通称「庭園プロジェクト」）を経て見出されたエリアを加え，令和時代の新たな景勝地として「十二景」が策定された。その内容は，下表の通りである（表－1）。



図－1 令和十二景を解説した庭園パンフレット（ホテル椿山荘東京提供）

表－1 椿山荘十勝・令和十二景比較表

椿山荘十勝	現存・水景	竹裏溪（現：ほたる沢） 涵翠池（現：幽翠池） 聴秋瀑 古香井 雲錦池 稻香亭 三又松 芙蓉亭 天狗松 延年橋	椿山荘令和十二景	継続	ほたる沢 幽翠池 聴秋瀑 古香井 雲錦池 三重塔[圓通閣] 御神木 般若寺式石灯籠 椿山・椿小路 五丈滝 閑雅の庭 望郷橋からの水景
	現存せず				新たに追加

3. 共有・共感を重ねた育成管理技術

続けて「令和十二景」が考案された背景，価値，そして各エリアの特性を踏まえた管理方法について，将来の関係者にも正確な情報を伝達すべく，「庭園育成管理指針」（以下，管理指針）を作成した。もちろん，こうした類の資料

を作成・提供する行為自体は珍しくない。設計者が，自身の意図をできるだけ正確に伝えたいと望むのは，きわめて自然な欲求であろう。だが，その活かし方についてはどうだろうか。実のところ，管理指針が十分に活かされているケースは少ないと感じる。

そこで弊社は，上記の管理指針とあわせて「定期共有会」（以下，共有会）を提案し，現在も季節ごとに実施している。参加メンバーは，ホテル椿山荘東京からマーケティング部および施設管理課，また庭園内で催されるインスタレーションやイルミネーションなど演出部分を手掛けるメンバー，そして庭園の日常管理を行うチームと弊社庭師である。庭園内のインスペクションに加えて，客室内から行う景観確認，あるいは高木群を含めた樹木管理のサイクル，園路補修の工法，発生材のリユース等々について，多角的な協議を重ねている。管理指針の提供も不可欠ではあるが，さらにその先に眠る人びとの共感（心）に力を注ぐことが，より永続的な文化伝承の鍵となるはずだ。

どんな名園であっても，結局のところそれを管理するのは人である。そして人は心を備えており，この心が欠けていては何を積んでも先はない。共有会では，眼前の椿山荘庭園を対象としつつ，ときには共同作業を挟みながら，関係者間の共感度を高め合うこと，心の通った対話を積み重ねることが最大の目的となっている（写真－5）。



写真－5 定期共有会の様子

また共有会では，主要エリアの点数化といったことも進めている。弊社で日ごろから進めている“暗黙知の形式知化”を応用したもので，関係者全員で敷地全域を巡回し，「なぜ美しくなったのか」あるいは「なぜ美しくなくなってしまったのか」など意見を出し合い，事前に準備した配点表に基づいて，評価の定量化を試みるものである。

さらには，日々最前線に立って来館者と接しているサービススタッフに向けた庭園講座も実施している。椿山荘庭園の成り立ちをはじめ，開業後の移り変わり，これまで収集した写真や資料を紹介しながら，ともに知見を分かち合う場となっている。弊社が運営管理を行う無鄰菴でも，

「フォスタリング・フェロー」と呼ばれるボランティアの無料ガイドが一定の人気を得ているが、そもそも当地の熱心なファンである彼・彼女らによる解説は、下敷きとなる台本こそあれ、他の一般的なツアーガイドとは比較にならない熱量や魅力を有している。ホテル椿山荘東京においても、実際にガイドを手掛けることが多いサービススタッフの心根をしっかりと育むことによって、他に類をみない庭園愛に満ちた案内が実現していくのではないかと期待している。ただし、一度や二度の講座でこの心が醸成されるものではない。本当の効果が発揮されるのは、もう少し機会を重ねてからだろう。今後も継続的な実施を目指している。

その他、希望するスタッフには、ホテル椿山荘東京が位置する目白エリア周辺の庭園見学も行っている。昨年度は小石川後樂園や護国寺を巡り、過去の偉人たちの足跡を近くで学ぶ機会となったが、実施後のアンケートでも複数の参加者が綴っていたように、日常から一歩足を踏み出すことによって、かえって自らが携わる椿山荘庭園の役割を再発見するきっかけとなっている。

4. おわりに

現在、観光立国日本を支えるこの国の緑地空間は、ますますニーズの高まりを見せているものの、肝心の担い手不足が顕著となっている。これに輪をかけて、働き方改革関連法改正や加速度的に進む少子高齢化が、造園業界のこれまでのあり方を見直すよう迫っているが、だからこそ、この業界にいる人びとが安心して働き続けることができるビジョンの明確化、仕組みの実装がますます不可欠となっていくのだろう。この問題を放置したままでは、伸びた枝を刈り揃える現状追認型の技能だけが残し、庭園が発する声に耳を澄ませ、そこに潜む可能性を引き出す創造型の技術はたちまち衰退する。庭園を所有する者、またそれらを管理する者は、ともに手を取り合い、一貫した姿勢で「心と技」を磨いていかなければならない。



写真－6 山縣の言葉が刻まれた「椿山荘の碑」

最後に、山縣が石碑に遺した言葉を取り上げておきたい。以下は原文に基づく現代語訳(『歴史』椿山荘選書、2011(平成23)年より抜粋)である(写真－6)。

「そもそも世の山水を楽しむ者は、遠く離れた片田舎にもの静かな場所を探し求めて、初めてそのような場所を見つけるものだ。私もそのような場所を都に程近い所に見つけたのである。私は人の手の加わらない自然のままの景勝の地をひたすら探し求めて、天のお蔭で望み通り、そのような地を手に入れたといっていいただろう。(中略)後にここに住む者はどんな人物か分からないが、その人物も私のようにこの自然を守り続け、この山水を楽しむような私の望み通りの人物であろうか」。

あわせて、初代社長である小川が遺した言葉にも目を向けておきたい。1963(昭和38)年の日本経済新聞に掲載された「私の履歴書」の一文である。

「世の繁栄は緑と不可分である(中略)日本が新しい平和産業の基地となると、大衆は必ず「緑」に向かって行進するに違いない。(中略)ここには将来、庭の木をいかにして世界第一のホテルを建て植木屋の労にむくいたいと思っているが、まだまだ先の夢である」。

激しい時代を駆け抜けたかつての所有者や管理者たちが、それぞれ椿山荘庭園に対して強い想いを抱いていたことがわかる。山縣が小田原古稀庵で臨終の時を迎えてから100年余り、富子夫人や小川がこの世を去りいよいよ半世紀が経過しようとしている。今日を生きる我われも、この庭園を前に同じ視点を持ち続けていたいと願う。

末尾となったが、当地を舞台に進めてきた上記のとり組みに対して、常に深いご理解をお示しいただいているホテル椿山荘東京の皆様には、この場をお借りし御礼申し上げます。世界中が辛く苦しいコロナ禍の時代に、「当施設は庭園こそが本質」と語りかけて下さったこと、またその際、弊社へご相談くださった御恩は筆舌に尽くしがたい。もちろん、ともに作業を行う庭園管理チームの皆様、演出関係を担っておられる皆様、延いては、本学会100周年という記念すべきタイミングで学会賞応募をご推薦くださった方々にも改めて感謝を申し上げ、引き続き関係者全員で、当地の素晴らしさをより多くの人びとへ伝えていきたい。

また、今年度も上述した庭園修景整備や定期共有会を継続しており、並行して、将来に向けた基礎情報の収集(毎木調査等)に努めている。これらを通じて得られたデータを最大限に活用し、さらに合理的な管理体制を見出しつつ、山縣が語った「この山水を楽しむような」誇るべき担い手を一人でも多く育てていきたい。

ランドスケープ研究

vol.89 No.2

会長就任にあたって 日本造園学会・次の100年に向けて

大黒 俊哉

特集

100周年記念特集号(その3) 社会の変化とランドスケープ

解題

・解題

村上 暁信

第一部：論考

- ・社会の変化に応える造園・ランドスケープの役割
- ・風景論の今後の展望に関する試論
- ・次の世代へ批評の場を用意するために
- ・「フォスタリング」ではぐくむ造園実務者の人財育成

大黒 俊哉

小野 良平

石川 初

加藤 友規

第二部：全国大会企画報告

- ・インクルーシブな学会へ：100周年記念全国大会における家族・子ども参加企画を通じた考察
飯田 晶子・別所 あかね・寺田 光成・マリア エルミロヴァ・山崎 嵩拓
- ・これからの学会を考える ～百の景を展望する～
山本 清龍・赤澤 宏樹・上田 裕文・佐々木 竜太・
江尻 晴美・大野 暁彦・岡田 準人・高取 千佳

連載

生きものの技術ノート No.126

- ・天然海綿スポンジを用いた環境DNA パッシブサンプリング法

今村 史子

やさしい風景計画学 No.12

- ・風景計画の現在と未来

水内 佑輔・高山 範理・伊藤 弘

2024 年度日本造園学会賞受賞者要旨

- ・公園リノベーションを主体的、計画的に展開していくために
『生まれ変わる公園 -公園リノベーションの指南書-』
平田 富士男・今西 良共・米田 剛行・町田 誠・塚田 伸也・竹内 智子・平松 玲治・
佐藤 留美・磯脇 桃子・後藤 幸・徳永 哲・萩野 一彦・橘 俊光・曾根 直幸
- ・『進士五十八の日本庭園 技心一如で自然に順う』 進士 五十八
- ・〈ぶるーむの風〉他、一連の林地再生をテーマとする作品 大野 暁彦
- ・福武トレス -旧福武書店迎賓館庭園再生と新築棟への展開- 萩野 彰大
- ・椿山荘庭園における「令和十二景」の創造
-日本庭園の「心と技」の共有・共感を重ねた育成管理技術- 田中 幹・山口 満・加藤 友規
- ・『東京農業大学造園科学科100周年記念時代をつくる造園家のしごと』
東京農業大学造園科学科「農大造園の100年と100人のしごと」企画チーム